

第2回 こども夏休み天体観測教室に参加して

前田雄亮（京都市青少年科学センター）

8月7日、晴れ。連日、35度を超える猛暑日が続き、少し歩いただけで汗が吹き出してくる。空には熱気を吸い込んだ雲が、背丈を伸ばしている。ここ数日、入道雲が膨らんで通り雨を降らせる天気が続いていたので、スタッフ・参加者ともども、空の様子を気にしながらの観測会となった。

まずは、天体望遠鏡の組み立て。参加者はそれぞれのグループに別れ、天文台の半地下から天体望遠鏡を運び出す。組み立てが済んだあと、望遠鏡の先を太陽へと向ける。望遠鏡を太陽へ向けるときは、夜、星を見る時の導入方法とちょっと異なる。地面に写る影を見ながら導入する。全員、太陽を観測しているはずなのに、汗を拭きながら、一所懸命地面を見つめている。不思議な光景。

投影板上に写る白く丸い太陽。残念ながら黒点は見られなかったが、見る見るうちに移動していく太陽に驚く。地球から1億5千万 km 離れた太陽の大きさを測るため、各グループ、ストップウォッチをかまえ、記録を繰り返している。突然、太陽が投影版から姿を消す。太陽が雲に隠れてしまったのだ。しばらく休憩。



地面を見ると、もちろんだが、石がある。だが、この花山天文台の石は古い時代の石だ。約2億年前、海の底でできたとされる石だ。チャートと名づけられている。そして、非常に硬い。鉄より硬いので「火打ち石」として使われる。「火打ち金」で打ち付けると火花が飛ぶ。

午後5時11分、「幻日」という声が飛ぶ。皆、一斉に空を見上げる。雲に隠れた太陽の右側に七色の光のかたまりが輝いている。空気中の水に特

別な条件で光が差し込むと現れる「幻日」という珍しい現象だ。各々、カメラを空に向けていた。黒点は見られなかったが、より珍しいものを見ることができた。

夕食をはさんで、夜の天体観測。雲の切れ間に、月や木星、さそり座のアンタレス、こと座のベガ、わし座のアルタイル。はくちょう座のデネブとアルビレオ。花山天文台のドームに灯がともった。望遠鏡を片付け、天文台へ登る。丸いドームの中に、木星へと向けられた白い大きな天体望遠鏡。狭い階段を注意しながら登り、レンズをのぞくと、美しいしましまの木星がゆらゆらゆれている。

図書室に戻り、アンケート、今日一日のスライドショー、そして最後の挨拶。炎天下の一日、とても疲れているはずなのに、皆、タクシーに乗り込む最後まで笑顔だったのが印象的だった。

この日、初めて天体望遠鏡を操作したという人がほとんどだったのではないのでしょうか？私が天体望遠鏡を初めて扱ったのは、小学校6年生。夏休みに、熊本県天草の天文台で、満天の星空と、いくつもの星団・星雲を観測して以来、望遠鏡が欲しくて欲しくて、毎晩のように天文雑誌のショップ欄を眺めていたのを覚えています。冬になって、天体望遠鏡が家に届き、早速組み立てたのですが、一人で持ち運ぶにはちょっと重い。少し欠けた月が、とてもきれいな夜。公園までの道を、両親と姉に手伝ってもらって、せっせと運ぶ。蛍光灯が明るい公園で手際悪く、望遠鏡を組み立てる。姉がつまらなそうにしていたのを記憶している。やっと組み立て、レンズをのぞきながら、鏡筒を月へと向けたとき、パッと目の前が明るくなる。月が入った！首筋のあたりがゾクゾクするのを感じながら、ゆっくりピントを合わせていく。無数のクレーター、灰色のグラデーション。「図鑑の月」だった月が、目の前に「宇宙の月」としてある。しかも、自分の手で操作する望遠鏡で観測している。家庭用の天体望遠鏡で、想像以上の美しい月が見られたことに、家族一同、興奮しながらレンズをのぞきこんだ。初家族観望会から16年過ぎた今でも、あの時の月は綺麗だったと姉は言っている。

私の中で、夜の公園の家族観望会が小さな火種となり、星好きがさらに広がり、もっとたくさんの人に星を見て欲しいと思うようになった。地学を学ぶようにもなったし、私設天文台や、プラネタリウムで働くようになったのも、この火種が燃え続けているからだと思う。花山天文台は「火打ち石」に使われるチャートの上に建てられている。たくさんのイベントが「火打ち金」となり、花山天文台で火花を飛ばし、参加者の心に「星好き」の火種が灯ったならば、この上なく嬉しく楽しく思う。